スフィンクスの母娘に生じた色素性じん麻疹

森 智子¹⁾, 永田雅彦^{1,2)}, 佐藤常男¹⁾

要約— 人の色素性じん麻疹に相当する瘙痒を伴う紅色ないし色素性丘疹をスフィンクスの母娘に認めた。発疹はいずれも若齢より発症しており、病理組織学的に異型性を伴わない肥満細胞のび慢性浸潤が真皮に観察された。抗ヒスタミン剤により発疹は消退した。

キーワード: 色素性じん麻疹, 瘙痒, 猫, 肥満細胞症

緒 言

肥満細胞は、皮膚、肝臓、脾臓、消化管など様々な臓器で異常に増殖することが知られている⁴⁾。動物においては、肥満細胞増殖性疾患の定義や分類は統一されていないが、肥満細胞腫は、猫では皮膚型および内臓型に区分され、皮膚型は比較的良性経過をたどることが多い⁴⁾。今回われわれは、スフィンクスの母娘2頭に発生した肥満細胞の非腫瘍性増殖を経験し、人の皮膚に生じる肥満細胞症の一つである色素性じん麻疹に相当する疾患と診断した。

症 例

症例 1

グレー＆ホワイトのスフィンクス、2歳齢、避妊雌 (Fig. 1)。生後6カ月頃、体幹に発疹が生じ近医を受診した。皮膚糸状菌症と診断され加療後発疹は消退したが、2歳齢の平成9年12月初旬、両大腿部に瘙痒を伴う赤色丘疹の散在が認められた。発疹は腋窩に拡大し、加療による改善に乏しく漸次悪化したため、平成10年3月30

日に日本大学アニマルメディカルセンター受診となった。両腋窩、体幹腹側、両大腿部、尾部全域にわたり紅色ないし色素性丘疹の散在がみられた (Fig. 2)。四肢端には著しい瘙痒を伴う浮腫性紅斑が認められ、診察中もしきりに体中を舐めたり咬む動作がみられた。ダリエー徴候が陽性であった。皮膚搔爬検査、毛検査、皮内反応 (ノミ 1:1000 w/v, チリダニ 1:1000 w/v; コナヒョウヒダニ, ヤケヒョウヒダニ; Greer lab., NC, USA) では特記すべき所見は認められなかった。真菌培養検査では *Microsporum canis* (*M. canis*) の発育が認められた。血液検査および血液化学検査で異常は認められず、ウイルス検査は FIV(−), FeLV(−), FIP(200倍) であった。丘疹の病理組織学的検査では、真皮に異型性に乏しい肥満細胞様細胞のび慢性浸潤が認められた (Fig. 3)。トルイジンブルー染色で浸潤細胞の細胞質内顆粒は異染色性を示したことから、これらの細胞を肥満細胞と判定した (Fig. 4)。PAS染色を施行したが、真菌感染は認められなかった。抗ヒスタミン剤である塩酸ヒドロキシジン (アタラックス®) 2 mg/kg BID, 次いでフマル酸クレマスチン (タベジール®) 1 mg/head BID で治療したところ、フマル酸クレマスチン投与5日後に発疹が消退した。その後休薬により一時増悪傾向を認めたが、治療開始7カ月後の現在は休薬による再発を認めていない。

症例 2

グレー＆ホワイトのスフィンクス、6カ月齢、雌。症例1の子。生後3カ月頃から全身に瘙痒を伴う発疹がみられた。近医で皮膚糸状菌症と診断され加療されたが軽

¹⁾ 日本大学生物資源科学部 (神奈川県藤沢市亀井野 1866)

²⁾ ASC どうぶつ皮膚病センター

(東京都調布市深大寺東町 1-3-2)

Fig. 1 Clinical feature of Cat 1. Note erythematous lesions on the ventral abdomen and extremities.

Fig. 2 Clinical feature of Cat 1. Note diffuse and coalescing erythematous and pigmented papules on the right lateral thigh.

Fig. 3 Histologic appearances of Case 1 showing diffuse infiltrations of small round cells at the dermis (H&E stain ×60).

Fig. 4 Histologic appearances of Case 1 showing diffuse infiltrations of mast cells with metachromatic granules at the dermis (Toluidine blue stain ×60).

快せず、平成10年4月27日に日大アニマルメディカルセンター受診となった。両腹部に暗褐色小丘疹の散在が認められた。ダリエー徴候は陽性であった。皮膚掻爬検査、毛検査にて特記すべき所見は認められず、真菌培養検査で *M. canis* の発育が認められた。血液化学的検査では、ALT, ALKP の上昇が認められた。ウイルス検査は FIV(−), FeLV(−), FIP(6400倍)であった。丘疹の病理組織学的検査の結果は、症例1とほぼ同様であった。PAS染色を施行したが、皮膚生検組織に真菌の感染は認められなかった。抗ヒスタミン剤であるフマル酸クレマスチン(タベジール®) 1 mg/head BID で治療したところ発疹が消退した。その後、抗ヒスタミン剤の休薬により増悪傾向を認めた。本例は飼主とともに海外に転出したため、追跡不可能となった。

考 察

医学領域では、皮膚に生じる肥満細胞症を単発性肥満細胞腫、色素性じん麻疹、び慢性肥満細胞症に分類し、色素性じん麻疹はさらに若年性と成年性に区分されている⁵⁾。若年性色素性じん麻疹は、通常生後1年頃までにじん麻疹の発作を反復し、全身に痒痒を伴う赤褐色斑や癒合性丘疹が多発する特徴を有している。獣医領域ではこれまでに馬、犬、猫で人の色素性じん麻疹に相当する疾患が報告されており¹⁻³⁾、猫の症例として血縁関係にある3例のスフィンクスが報告されている⁶⁾。症例は祖父が同一であり、いずれも若齢の発症であった。発疹は紅斑や丘疹が体幹、四肢、頸部、頭部に汎発性かつ対称性に認められ、病理組織学的検査で真皮血管周囲によく分化した肥満細胞の浸潤が観察されている。本症例の臨床像および組織像はこれら症例とほぼ同様であった。こ

れまで本邦における猫の色素性じん麻疹の報告はなく、本症例が第1例と思われた。色素性じん麻疹は、人では常染色体優性不完全型で家族性に発症することが多く、本症例を含めた猫の症例も同様の遺伝形式を有することが推測された。

猫における本症の病理発生は不明である。しかし、過去の報告例⁶⁾および本例ともにスフィンクスであったことから、本症がこの品種固有の遺伝性疾患、あるいはこの品種に特異的な皮膚構造による反応性変化であることも予想された。なお本例からはいずれも表皮から皮膚糸状菌が分離されたが、検査成績および臨床経過より本菌をキャリアーとして保菌していたと考えられた。しかし、色素性じん麻疹の発症誘因として皮膚糸状菌が関与していた可能性を否定することはできず、今後症例を集積し検討する必要がある。

参考文献

- 1) Chastain, C. B., et al. (1998): Benign cutaneous mastocytomas in two litters of Siamese kittens. J. Am. Vet. Med. Assoc., 193, 959-960.
- 2) Jeromin, A. M., et al. (1993): Urticaria pigmentosa-like disease in the dog. J. Am. Anim. Hosp. Assoc., 29, 508-513.
- 3) Prasse K. W., Lundvall, R. L. (1975): Generalized mastocytosis in a foal resembling urticaria pigmentosa of man. J. Am. Vet. Med. Assoc., 166, 68-70.
- 4) Scott, D. W., et al. (1995): Small Animal Dermatology. 5th ed. Philadelphia. W. B. Saunders, 1056-1064.
- 5) 上野賢一 (1992): 皮膚科学. 第5版. 京都. 金芳堂. 430-432.
- 6) Vitale, C. B., et al. (1996): Feline urticaria pigmentosa in three related Sphinx cats. Vet. Dermatol., 7, 227-233.

Urticaria pigmentosa in the mother and a daughter of Sphinx Cats

Tomoko Mori¹⁾, Masahiko Nagata^{1, 2)}, Tsuneo Sato¹⁾

¹⁾ College of Bioresource Sciences, Nihon University

²⁾ Animal Dermatology Center, ASC

Abstract — Two related Sphinx cats, the mother and her daughter, showed pruritic maculae and pigmented papules, which correspond to those of urticaria pigmentosa in humans. The skin lesions in both cases were juvenile onset, and histopathological examination revealed diffuse infiltration of well-differentiated mast cells at the dermis. The lesions were resolved with antihistamines.

Keywords : urticaria pigmentosa, pruritus, cat, mastocytosis

Jpn. J. Vet Dermatol. Vol. 5 No. 4 37~39 (1999)